
ミュウの1日

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミュウの1日

【Nコード】

N9690M

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

幻と呼ばれるポケモン、ミュウの1日。

（前書き）

短編でございます。

これはGREENというサイトで僕が執筆した物なのですが、こつちでも投稿する事にしました。

かわいいミユウを想像、もとい妄想（笑）してみた作品です。

「ふあゝ……うーん、よく寝たゝ」

ここはカントー地方、トキワの森と呼ばれる小さな森の中。
木に寄りかかって眠っていたとある1匹のポケモンが目をごすりながら大きな欠伸^{あくび}をする。

薄い桃色を基調とした体色、長い尻尾につぶらな瞳をしているとても可愛いそのポケモンはミュウ。

幻のポケモンと言われる大変貴重な存在だ。

「お腹空いたなゝ……よし、今日はあれ食べよつとゝ」

目が覚めたミュウはまるで小さな子供みたいに無邪気な笑みを浮かべながら、木の上に実っていたとても甘いモモンの実を手に取り、一口それにかぶり付く。

「うーん、甘くて美味しいゝ」

余程美味しかったのか、満面の笑みを浮かべるミュウ。
そしてあつという間にミュウはモモンの実を平らげてしまった。

「あゝ美味しかった、ごちそうさまゝ さて、今日は何して遊ぼうかなあ？ うーん……あつ、久しぶりに街に行ってみよつとゝ」

そう言ってミュウは森から近くにある街、トキワシティに向かって飛び立っていった。

森からそんなに離れていなかった為、ミュウはあつという間にト

キワシティ上空に到着する。

「あつ、彼処でポケモンバトルやってる♪」

トキワシティにあるポケモンセンター前で、ポケモントレーナーである少年が2人、自分のパートナーポケモンをモンスターボールから出してポケモンバトルを行っていた。

そのバトルをミュウは近くで見物しようと思い、ポケモンセンターの近くへと降下する。

「変身！」

着地したミュウは建物の物陰に隠れ、技の1つである変身を使用する。

すると、薄桃色だった体色が黄色に変色、長かった尻尾も雷をイメージさせるようなギザギザの形に変化する。

そして長い耳が生え、体は何処かネズミに近い姿へと変わり、両頬には赤くて丸い小さな袋が現れた。

ミュウはトキワの森に生息しているポケモンである、ピカチュウに変身したのだ。

「これでよし♪ さあ、バトルバトル♪」

早くポケモンバトルを見たいピカチュウに変身したミュウは駆け足で向かっていく。

「ヒトカゲ、火の粉攻撃だ！」

「負けるなポップ！ 風起こしだ！」

少年達の間には2体のポケモンがバトルしていた。

1体は茶色とクリーム色を基調とした体色で小型の鳥のような姿をしているポケモン——ポツポと呼ばれるポケモンだ。

そしてもう1体はオレンジ色を基調とした体色で恐竜に似た姿をしており、尻尾の先には炎が灯っている——ヒトカゲと呼ばれるポケモンだ。

ヒトカゲとポツポが、トレーナーである少年達の指示を聞いてバトルをしていた。

“火の粉”という指示を聞いたヒトカゲは、口から小さな炎をいくつも吐き出してポツポに向けて放つ。

しかし、ポツポは翼を思いっきり羽ばたかせて強力な突風を作り出し、火の粉を吹き飛ばしてしまう。

「やってるやってる」

バトルに巻き込まれないように少し離れた場所から、ミュウはこのバトルを見学していた。

この後は一体どんな展開になるんだろうと考えながら、目をキラキラとさせながらじっと見つめるミュウ。

「ポツポ、つつく攻撃だ！」

少年がポツポにそう指示すると、ポツポはヒトカゲに向かって急降下、鋭い嘴でヒトカゲを攻撃を仕掛けようとする。

「ヒトカゲ、煙幕を使え！」

もう1人の少年が指示を出すと、ヒトカゲは口から黒い煙を吐き出して自分の姿を隠してしまう。

ヒトカゲの姿は煙幕で隠れてしまい、ターゲットを見失ったポツ

ポは急降下をやめて急停止する。

うかつに近づけなくなってしまったポツポはどうしたら良いのか
わからずにおどおどしてしまう。

「今だ！ 火の粉攻撃！」

今がチャンスとばかりに、少年は大きな声でヒトカゲに指示を出す。

指示を受けたヒトカゲは煙幕の中から最大パワーで火の粉を放ち、
それをポツポに直撃させた。

「あゝポツポ!？」

火の粉をまともに受けてしまったポツポは地面に墜落、目を回して
しまった。

火の粉を受けたせいで、体のあちこちが軽く焦げている。

「やったゝ俺達の勝ちだぜ！ やったなヒトカゲ！」

バトルに勝利した少年とヒトカゲは嬉しそうな表情をしながら互
いに近づき抱き合う。

「あゝ負けちゃったか……でも、楽しいバトルだったよ！ またい
つかバトルしてくれよな！」

「もちろん！」

互いに全力を出してバトルした2人は何処か清々しい表情をしながら
がらがつちりと握手をする。

「うんうん、やっぱりバトルってこうでなくっちゃ」

2人の良いバトルを見れてとても満足そうな表情をするミュウ。

「さて、バトルを見終わったし……次は何処に行こうかな？
…あつ、何だろあれ？」

次に何処へ向かうかと考えていた時、ミュウは何かを発見する。
その何かとは、冷たくて甘いソフトクリームを売っているお店だった。

「何か甘い香りがするね……行ってみよっと」

ミュウは駆け足でソフトクリームを売っているお店に向かう。
お店の前では小さな女の子がお母さんと一緒に美味しそうにソフトクリームを食べていた。

「わあ、何だか美味しそうな食べ物だな」

親子の近くまできたミュウは物欲しそうな目でソフトクリームを見つめる。

そんなミュウに少女が気がつく。

「あつ！　ねえママ見て！　ピカチュウよ！」

「あら本当だわ！　トキワの森から出てきたのかしら？」

「もしかして、これ食べたいの？」

ミュウがじっとソフトクリームを見ている事に気づいた少女が、

ソフトクリームを指差しながら尋ねると、ミュウは嬉しそうにしながら頷いて応える。

「良いよ、あげる♪」

優しい少女はソフトクリームをミュウに手渡す。

両手でしっかりと持ちながら、ミュウは美味しそうにソフトクリームをペロペロと舐める。

「良かった、気に入ったみたいだね♪」

手渡したソフトクリームを美味しそうに食べるミュウを見て嬉しそうに笑みを浮かべる少女。

少女がミュウを見ている時、母親は徐に^{おもむろ}手首に付けていた腕時計を見る。

「あら、もうこんな時間だね。さあ、そろそろお家に帰りましょ。お父さんが待ってるわ」

「うん！ バイバイ、ピカチュウ♪」

少女と母親は仲良く手を繋ぎ、家に帰る為にその場から去った。
った。

親子が去ったあとも、ミュウはまだ美味しそうにソフトクリームを食べている。

「これ美味しい♪ 人間ってこんな物食べてるんだね」

よっぽど気に入ったのか、ミュウはその後あっという間にソフトクリームを食べてしまった。

そしてミュウはふと空を見上げると、もう夕焼け空になっていた。

「もうこんな時間なんだ……僕も帰ろつと」

ミュウは変身を解いて本来の姿に戻り、また森に向かって飛んでいった。

幻のポケモン、ミュウ……なかなか見つからないとても珍しいポケモン。

だがしかし、幻と言われているミュウは実はすぐ近くにいるのかもしれない。

このミュウのように……

(後書き)

ミユウ

「君の近くにいるのが、ミユウかもね」

短編終了でございます。

ミユウ

「ねえねえ、ソフトクリームがアイスクリームちようだい」

……よっぱど気に入ったようで(汗)
しょうがない、あとで買ってあげるよ。

ミユウ

「やった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9690m/>

ミュウの1日

2010年10月8日11時51分発行